
銀河鉄道の夜

宮沢 賢治

目次

一、ごご午後の授業

二、活版所

三、

四、

五、

八、七、六、

銀
河
鉄
道
の
夜

一、午后ごごの授業

「ではみなさんは、そういうふううんに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊つるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなどころを指さしながら、みんなに問とをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちみがするのです。

ところが先生は早くもそれを見附みけたのです。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢いきおいよく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすくとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困はこった平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙だまってそれを受け取かって微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをするにわと扉をあけてさっきの計算台のところに来しました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって威勢いせいよくおじぎをすると台の下に置いた鞆かばんをもっておもてへ飛びだしました。それから元

氣よく口笛くちぶえを吹きながらパン屋へ寄かつてパンの塊かたまりを一つと角砂糖を一一袋ふろ買いいますと一目散いちもくさんに

いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰かえつていますか。」博士かたは堅かたく時計にぎを握にぎつたまままたきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭はこをふりました。

『**どうしたのかなあ。**』た平はこたい箱はこをもういちど手てにもつた紙しきれと引き合あせてから、さっきの卓子かの人へ持もつて来きました。その人ひとは黙だまつてそれを受け取とつて微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉かをあけてさっきの計算台けいさんだいのところに来きました。するとさっきの白服はくふくを着きた人ひとがやつぱりだまつて小さな銀貨ぎんがを一つジョバンニに渡わたしました。ジョバンニは俄にわかに顔かほいろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると台だいの下したに置おいた鞆かわばんをもつておもてへ飛とびだしました。それから元もと氣くちぶえよく口笛くちぶえを吹ふきながらパン屋へ寄かつてパンの塊かたまりを一つと角砂糖かくさとうを一一袋ふろ

買いますと一目散にいちもくさん

いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったままかた
たきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

『どうしたのかなあ。』た平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取かす
って微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをするかばんと扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって威勢よくおじぎいせいをすると台の下に置いた鞆をもっておもてへ飛びだしました。それから元くちがえ
氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一一袋ふくろ
買いますと一目散にいちもくさん

いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったままま
たきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

『どうしたのかなあ。』た平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合
せてから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙つてそれを受け取
つて微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来まし
た。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジョ
バンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじ
ぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元
氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一一袋
買いますと一目散に
いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまま
たきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

『どうしたのかなあ。』た平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せ
てから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙ってそれを受け取
つて微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来まし
た。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョ
バンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって威勢よくおじ
ぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元
氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一一袋
買いますと一目散に
いきました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまま
たきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

『どうしたのかなあ。』た平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙つてそれを受け取つて微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一一袋買いますと一目散に
いきました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまま

たきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

『どうしたのかなあ。』た平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると思をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると思の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散にいました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握つたままたきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「**どうしたのかなあ。**」た平たい箱はこをもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取つて微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄にわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると台の下に置いた鞆かばんをもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛くちぶえを吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊かたまりを一つと角砂糖を一一袋ふくろ買いますと一目散いちもくさんにいました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰つていますか。」博士は堅かたく時計にぜいを握つたまままたきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。た平たい箱はこをもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙だまってそれを受け取って微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄にわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると台の下に置いた鞆かばんをもつておもてへ飛びだしました。それから元氣くちぶえよく口笛ふを吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊かたまりを一つと角砂糖を一一袋ふくろ買いますと一目散いちもくさんにいました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅かたく時計を握にぎったまままたきました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ようすでしたが、眼めをカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもしも立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいっぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどころでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本をもってきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁いっばいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼく

が、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がつてわざと返事をしなかったのだ、そう考えたとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

先生はまた云いました。

「ですからもしこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮んでいてのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいてるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えましたが

白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんなのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こっちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒——即ち星しか見えないのです。よう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音が

いっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅すみの桜さくらの木のところを集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜からすうりを取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ふってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝えだにあかりをつけたりいろいろ仕度したくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲まつてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴くつをぬいで上りますと、突き当りの大きな扉とをあけました。中にはま

だ昼なのに電燈がついてたくさんの輪転器がばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いて居りました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしやがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近く of 四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだんひろいました。

六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの

卓子の人へ持つて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取かつて微かすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄にわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをする。と台の下に置いた鞆かばんをもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛くちぶえを吹ふきながらパン屋へ寄よつてパンの塊かたまりを一つと角砂糖を一一袋ふくろ買かひますと一目散いちもくさんにいました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰かへつていますか。」博士は堅かたく時計を握にぎつたままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨おととい日大へん元氣な便りがあつたんだが。今日あたりもう着おくころなんだが。船が遅おくれたんだな。ジョバンニさん。あし

た放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつった方へじつと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。